

多言語・多文化社会における地球市民性の醸成にむけた機能的クリップ
ESD 教材の開発と活用

—インドネシアの公立小学校における写真教材を活用した実践報告—
Development and Application of a Functional ESD Clip Material for
Establishing Students' Global Citizenship in Multilingual and
Multicultural Society: A Practice of Rural Indonesia

吉田 賢一*, 建元 喜寿**, 佐藤 真久***, 工藤 泰三**, 村松 隆****

YOSHIDA Kenichi*, TATEMOTO Yoshikazu**, SATO Masahisa***, KUDO Taizo**,
MURAMATSU Takashi****

*慶應義塾大学通信教育課程, **筑波大学附属坂戸高等学校,

東京都市大学, *宮城教育大学

〔要約〕本報告の目的は、筆者らが開発中の写真教材を活用し、2013年11月にインドネシアの公立小学校で実施したESDのデモンストレーション授業について報告することである。一般的に、教員による一方通行の授業が多く、参加型や体験型の授業が少ないと言われている開発途上国の公立学校では、ESDが積極的に実践されているとは言えない。本報告は、写真という「生の素材」を活用することにより、子どもの想像力を掻き立てるESDが開発途上国で実践可能であることを示す。また、子どもの授業への「参加」や「想像力」を意識したESDを開発途上国で実践する際には、青年海外協力隊による技術移転が有効であることも併せて示唆する。

〔キーワード〕ESD, 写真教材, 青年海外協力隊, インドネシア

1. はじめに

環境教育やESDという言葉が、学校現場で市民権を得て久しい。だが、開発途上国の学校現場の場合、どうなのだろうか。第一筆者は、青年海外協力隊（職種：環境教育、配属先：西ジャワ州グヌン・グデ・パンランゴ国立公園、派遣期間：2011年1月～2013年1月）としてインドネシア共和国に派遣された。西ジャワ州の農山村地域の小中高等学校では、環境教育やESDの重要性を認識している教員がいる一方、その実践には至っていない学校が大半であった。

また、近年のインドネシアでは地方分権化のおかげで、地域の特性を生かした授業が実施できる体制が整っている。教育における地方分権化は、1994年から授業時間の20%を地方独自でデザインしていくことを認め、地方独自カリキュラム（local content

curriculum: LCC）プログラムが開始された（藤井 2010）。このことも、ESDを推進する背景となりうる。事実、LCCの授業時間を活用して環境教育に取り組む学校が現れつつある。

さて、本研究は、写真を活用したESD教材をインドネシアの公立小学校で実践した記録を報告する。ESDに対する関心が高まりつつあるインドネシアでの実践報告を通じて、本報告は実践者や国際協力関係者によるESD実践に貢献する。また、青年海外協力隊経験者である第一筆者と第二筆者による実践は、青年海外協力隊によるESDの技術移転が可能であることを示唆する。

2. 写真教材の開発

本研究は、青年海外協力隊及び帰国隊員から素材データ（写真）を収集し、加工するこ

とによって完成した。38 の国と地域から 498 枚の写真を収集した。収集した写真はパワーポイントの上半分に張り付け、下半分には分析データ及び解説文を付した。分析項目として画像情報（撮影場所、撮影年月、撮影者氏名）、ミレニアム開発目標との関係性、及び画像の解説文とキーワードが記載されている。実践者は、これらの情報を手掛かりとしながら、授業を構成することが出来る。尚、キーワードは、中高の学習指導要領、及び検定教科書をから選んだ。



図 1. 教材の具体例。

3. 実践報告

以下、インドネシアの小学校で実施した授業について報告する。

- 1) 学校名：チマチャン国立第一小学校。
(SDN Cimaican 1) 対象学年は 5 年生, 30 名。
- 2) 実施日：2013 年 11 月 22 日 (金)
- 3) テーマ：ストーリーを創ろう。

本実践では、「想像力」をテーマとした授業を実施した。その狙いは、普段は座学中心の授業を実施する当該小学校で、参加型学習を試み、身近な地域だけではなく国外も含む地域とのつながりを意識した授業を展開することである。

尚、当該小学校は、第一筆者及び第二筆者が青年海外協力隊としてインドネシアに赴任していた際、環境教育を実施したことがある小学校である。学校長が環境教育に熱心であり、ゴミ箱の設置や花壇の整備を行なっている。また、エキストラ・カリキュラムとして「環境教育チーム(児童約 30 名)」を構成し、環境教育活動を積極的に実施している。



図 2. 校庭の様子。環境教育の授業で作ったコンポストを使って、花壇を整備した。

4) 授業内容

編集集中の写真のうち 6 枚を用いて授業を実施した。写真は、インドネシアのゴミの様子を写したもの、首都ジャカルタの交通渋滞の様子を写したもの、日本の道路の様子を写したもの、及びウガンダの写真で人々が頭の上に水桶を乗せて生活用水を運んでいる様子を写したものを選んだ。子どもたちは、それぞれの写真から読み取れることを想像し、自由な発想でそれぞれの写真を活用しながらストーリーを創った。6 人で 1 グループを構成し、合計 5 つのグループがグループワークに取り組んだ。



図3. グループワーク中の子どもたち。6枚の写真を活用しながら、自由な発想でストーリーを組み立てる。

4. 結果と考察

グループワーク後、すべてのグループがストーリーを発表した。

1) 未来展望

3つのグループが、「未来展望」をテーマとしたストーリーを発表した。すなわち、インドネシアの写真と日本の写真を比較し、インドネシアも日本のようにゴミのポイ捨てがない環境意識の高い国になるべきだという発表である。

だが、結論に至るプロセスは極めてユニークであった。例えば、ジャカルタの渋滞の原因をゴミのポイ捨てに求めるストーリーがあった。すなわち、ゴミがポイ捨てされて路上にあふれている為、結果として車両が通行できなくなったというのである。

その一方、日本ではゴミのポイ捨てがなく、路上に障害物がない為、渋滞が発生しにくいというストーリーであった。子どもたちは、ゴミ、渋滞、道路の3つのつながりを写真教材から抽出し、ストーリーを創り出したのである。



図4. グループワークの成果を発表する子どもたち。ドラえもんや「どこでもドア」が登場するユニークな発表だった。

2) 日本人の視点

ひとつのグループが「日本人の視点」を意識したストーリーを展開した。つまり、日本人の主人公を想定し、主人公が日本からインドネシアに旅行するストーリーを通して、日本人がインドネシアの現状をどう見るか想像したわけである。その要諦は、日本人がインドネシアの直面する問題をどう感じるか想像することであった。子どもたちは、日本の写真とジャカルタの渋滞の写真やゴミが散乱している写真を比較し、日本人なら渋滞やゴミ問題をどう思うか想像しながらグループワークを進めたのである。写真教材を用いることによって、日本人の視点を想像したことが特筆されるだろう。

3) ローカルな視点

最後のグループは、ジャカルタと学校所在地である西ジャワ州チボダスを旅行するストーリーを発表した。発表では、道路が土砂崩れしているウガンダの写真を引用し、地元の西ジャワ州チボダスにも土砂崩れが発生している場所があると指摘した。子どもたちは、なぜ土砂崩れが発生するのかと発問し、森林伐採が共通する原因であることを発表した。

この発表では、遠く離れたアフリカの写真から地元にも同様の問題があることを発見し

たことが特筆される。様々な地域の写真を用い、共通の課題という視点で写真を切り取ることによって、子どもたちは「遠くの問題」を身近な問題に置き換えて考えることが出来るのである。



図5. 授業のまとめを解説する第一筆者。

4) まとめ

全ての発表が終わった後、第一筆者が総括を行った。つまり、足し算のように決まった答えがあるわけではない問題に挑む際には、想像力を活かして課題発見・解決をすることが求められると指摘した。インドネシアや世界が直面する環境問題には決まった答えがない為、想像力を発揮して問題解決に当たることが大切だと指摘し、授業を終えた。

5) 考察と結語

実践を通じて、子どもたちはゴミのポイ捨てと渋滞の関係、ウガンダとインドネシアに共通する課題、そして「日本人の視点」を想像し、自由にストーリーを創り出した。普段は、座学中心で教員による一方通行の授業が行われているが、写真教材を用いることによって、子どもたちは積極的にグループワークに参加することが出来た。学習者が主体的に学習過程に参加することを促す意味でも、開発途上国におけるESD実践は意味のあることだろう。

加えて、開発途上国は環境問題に対する脆弱性が高いという点でも、ESDの実践が求め

られる。環境問題や開発問題の影響を受けやすい地域だからこそ、人々の問題意識を醸成することが求められるのである。だが、開発途上国の農村部にESDの手法を技術移転することは困難である。なぜなら、言葉やアクセスの問題が生じるからである。

第一筆者と第二筆者は、青年海外協力隊の任期終了後もインドネシアでESDを実践し続けている。隊員として培った経験と語学力を活かせば、ESDの技術移転は可能であることを体現してきた。日本のESDの蓄積や経験を青年海外協力隊が開発途上国に伝える役割が期待されている。

一方で、開発途上国におけるESDは、研究されていない部分も多い。ESDの教育評価や現地のカリキュラムとの整合性など、調査研究が求められる分野がある。これらの研究は、本格的な定性調査が必要となってくるため、稿を改めて論じることにはしたい。

謝辞

本研究は、平成23-25年度科学技術研究費補助金（基盤研究（C））『国際理解教育・国際教育協力のためのデジタル紙芝居教材の構築法に関する研究』（研究代表者：村松隆）として実施された。当該教材の開発と利用については、三好直子氏（JOCV環境教育技術顧問）、吉川まみ氏（JOCV環境教育技術専門員）、から貴重な助言をいただいた。また、世界各地で活躍する多数の青年海外協力隊から写真データを提供して頂いた。この場を借りて謝意を表す。

引用文献

藤井美樹, 2010, 「教育の分権化と教員としての職業意識の変化ーインドネシア 西ジャワ州のケーススタディから」, 山内乾史編著『国際教育協力の社会学』, ミネルヴァ書房, 京都, 128-147.